

Title	性を生きる人間：人間学の見地から〈ジェンダー〉概念を再考する
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	年報人間科学. 1999, 20-1, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4472
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

性を生きる人間

——人間学の見地から（ジェンダー）概念を再考する——

〈要旨〉

個体としての人間は「性」を生きること余儀なくされている。性別をもたないいわば真裸の個人存在を想定する「個人主義」は、人間学を構築するための礎石とはなり得ない。しかし、「性」という語の多義性が問題を困難にしている。六〇年代以降、生物学的な意味での性別あるいは「セックス」と、社会集団がなう文化によって構成された性の様態としての「ジェンダー」との概念的区別が常識化した。とりわけジェンダー概念は、フェミニストの理論および運動の中核に据えられることになって、多大の役割を演じることになった。

本稿で、著者は二つの主張をおこなう。第一に、ジェンダー概念に関して、生物学的決定論でも、歴史主義的相対主義でもない、一種の自然主義を主張する。性の観念には生物学的要因によって規定される基底的側面があることを認めざるを得ない。こうした見地をニコルソンは「生物学的基礎づけ主義」として批判した。彼女はジェンダーに関して歴史主義の立場をとる。「セックス」という観念は西欧ではたかだか十八世紀に成立したに

菅野 盾樹

すぎず、この限りでセックスはジェンダーに包含されるというのだ。だがこれは、反自然主義的なハイパー人工主義にすぎない。

第二に、〈性〉のカテゴリーが、セックス（本質主義）とジェンダー（構成主義）の二分法を越えた非古典的カテゴリーであることを明らかにする。このカテゴリーは、プロトタイプ効果と無化の効果をとらなう「自然なカテゴリー」（ロツシエ）なのである。

キーワード

性差 自然なカテゴリー ジェンダー 文化相対主義 自然主義

一 人間性としての〈性〉

大宰治の小説「女類」の中に登場するある作家は、告白とも慨嘆ともつかぬこんな言葉を述べている。

わからねえんだ。女の気持が、わからなくなつて来るんだ。僕はね、人類、猿類、などという動物学上の区別の仕方は、あれは間違いだと思つてゐる。男類、女類、猿類、とかう来なくちやいけない。全然、種族がちがふのだ。からだがちがつてゐると同様に、その思考の方法も、会話の意味も、匂ひ、音、風景などに対する反応の仕方、まるつきり違つてゐるのだ。女のからだにならない限り、絶対に男類には理解できない不思議な世界に女といふものは平然と住んでゐるのだ。

彼の言葉を、単なる酔っぱらいのたわごととして簡単に片づけてしまえないような、ある種の真実味がそこにはある。とはいへ、もちろん彼の言い分をそのまま受け取ることはできない。なるほど、男と女の間の意志疎通がしばしばうまくゆかないのは確かだろう。しかし、同性間でも、気心の知れない相手に自分の意図を分らせることに難渋することはしばしばのことだ。そんな場合に比較すれば、たとえば長年連れ添つた夫婦とか、よく似た人生観や価値観を共有する男女の間では、よほど話の通りが早い。コミュニケーション

ンの成否は、性差によるのではなくむしろ個人差による側面が大き
いと見なくてはならない。

それにもかかわらず、作家の言葉は、逃れようもなく性的存在として生きてゐる人間について考察するための、重要なきっかけになる。男と女の性差をどのように考えたらよいのだろうか。彼が言うように、発話行為の意味、感覚、刺激への反応などのすべてにおいて、男女の性の間には埋められない差があるという見地が極端だとしても、逆に、性差などはまったく意味がない、「女」という「種族」などいるはずはない、この世には個々の人間がいるにすぎない、と言いつつてしまうこと——形而上学的な意味での「個人主義」を唱えること——もまた極端ではなからうか。なぜなら、たいていの人は自分を何らかの性として（たとえば、女性として）自覚しているからだ。人はけつして真裸の「個人」ではあり得ない。ある性に帰属するという自己認識は、性がカテゴリーとして一般的な規定性である以上、個人としての自分が単なる個を越えた集団的なものへ帰属していることの自覚でもある。このような意味で、〈性〉が人間のアイデンティティつまり自己同一性の重要な要素である点は否めないのではなからうか。

二 「性」の多義性

ただし、ひとくちに「性」といっても、その意味は多義的である。私たちが「性差」ということでまっさきに思い浮かべるのは、男女

の身体上の違いのことだ。生物学者や医師や心理学者は、身体性の様態としての性を「セックス」(sex)と呼ぶ。この意味でのセックスについては、三つのレベルでこれを問題にすることができるだろう。第一に、染色体のレベルにおける性がある。染色体はすべての細胞の核の中にあつて、細胞が分裂するときに姿を現すが、人間ではふつう四十六個、二十三対の染色体があり、互いに対をなす二十二個の染色体(これを「常染色体」という)と二個の性染色体(XないしY)で構成される。性染色体がXX型ならこの個体は女性であり、XY型なら男性である。しかし事実をもつと複雑で、XOという型をもつ女性もいるし(Oは染色体の欠如をあらわす)、XYYという型の男性もいる。染色体レベルにおける性の変異がいかに多様であるかを忘れないようにしよう。

次に、セックスの第二のレベル、すなわち性腺や生殖器によつて規定される性がある。つまり、女は卵巣が発達し子宮や膈をそなえ、男は精巣が発達し前立腺やペニスをそなえるといった、生物学的違いのことである。こうした性差とホルモンの働きのせいで、男だけが射精し妊娠させることができ、女だけが妊娠し、月経、授乳といった機能をいとなむことが可能となる。

さて、人間以外の動物では、セックスの差異が身体の大きさ、形態、移動率、利他行動、攻撃性などの面でさまざまな違いをもたらすことが観察されている。こうした違いを「性的二型」という。これがセックスの第三のレベルである。人間にも性差に基づく性的二型があるのだろうか。からだつきの特徴といえは、男性のほうが概

して身長が大きく、胸が短く、身長割に胸囲が大きく脚が長い。女性は身長では小さめで、胴長で腰幅が大きい。骨格、筋肉、皮膚、毛髪、血液などの指標で比較してもやはり性差が認められる。生理的機能(呼吸、代謝など)、体力や運動能力などの面でもやはり性による差が明らかである。このかぎりでは、人間に身体的な性的二型があることは否定できない。かなりの数のスポーツ種目が男女別で競われるのは、この事実を考慮したためである。

そうだとしても、これについては二つの点に注意が必要である。第一に、ここでいう性的二型はあくまで統計学的なものだという点だ。個人を比較するならば、ある男性は華奢なからだつきをしているのに、ある女性は身長も高く筋骨隆々とした体軀の持ち主であるといったケースもあるかもしれない。第二に、人間における身体的な性的二型のさまざまな事例が、文化的要因によつてかなり変異をきたすという事実も見過がせない。

人間の性的二型は、ふつうに私たちが「男らしさ」、「女らしさ」と呼んでいるものと大幅に重なり合うから、第二の点はこう言いなおしてもいいかも知れない。「男らしさ」と「女らしさ」は身体面にかぎっていつでも文化によつて相当に変わりうる、と。生物学的な性差が不変だというのは誤りだ、と主張するフェミニストもいる。社会のあり方や慣行が変化するにに応じて身体の上にも変化が生じざるを得ない、というのである。たとえば、現代社会とは異なり(健康な女性)が積極的に容認され推奨されるような社会が実現すれば、女性は肉体的にいまより強健になるだろう。逆に、伝統的社会で女

が概して男より小柄だったのは、社会が小柄で華奢な女性をよしとする価値観を有しており、そうした女性を生殖のために選択してきたからにすぎないからだ、というのである。

これは必ずしも学問的に実証された説ではない。しかし少なくとも、男女の性徴に文化が効果を及ぼすという論点は無碍に否定できないと思える。なぜなら、基本的にいつて、「文化」とは身体性から独立なシステムではなくむしろ身体性を基盤として成立する記号的構築物だからである。身体性と文化には循環的な因果性が働いている。二項対立的に鋭角的な対比をかたちづくる「文化」と「自然」という二つの観念は、ものごとを説明する理論的概念ではなく、じつは、それ自体が文化的表象の要素をなす記述的概念にすぎない。文化は相対的に自然から独立しつつもその根は自然に根ざしている。とくに言語は文化の形成にとつて枢要な役割を果たすが、言語とは基本的に身体性の能力にほかならない。おそらく私たちの言語は音声の表情ある身振りとして始まったと推定される（そして音声言語をもたない人々の言語である手話は、文字どおり身振りである）。たとえば好戦的な文化は好戦的なスタイルの言語をもつだろうし、その文化を生きる人々の身体性——表情や挙措、ひいては体つきさえも——が好戦的スタイルをおびるのは自然の道理であらう。

三 認知と行動の性差

以上三種の、身体性の様態としてのセックスには、多かれ少なか

れ明らかな性差がともなっている。ところで、男と女の性差はこれらセックスのあり方をこえてもはや純粹に身体性とは呼び得ない人間の存在様態にまで広がっている。この領域での性差を明らかにするためには、医学者や生物学者に替わって、今度は心理学者や人文科学者が考察をひきつがなくてはならない。問題は、はたして行動と認知に関して男と女の間有意な差があるかどうかである。上述した「男らしさ」、「女らしさ」という言葉のなかみのあと半分は、この種の差異にかかわっている。俗に女性性は社交的だが暗示にかかりやすい、これに対して男性は自立的で統率力があるなどというが、これは学問的にみて真実なのだろうか。

行動や認知の性差についてはかねて心理学や文化人類学などの分野で研究が続けられてきたしそれは現在も進行中であるが、大方が一致して明らかに性差があると認めているのは、だいたい次のような範囲の事柄に限られている。単語を覚えたり文章を書いたりする言語能力では女の子が男の子に勝っているが、算数のテストでは反対に男の子が優れた点数をとる。また、積み木で立体を作ったり図形を識別する空間能力は男の子のほうが勝っている。そして、他人の注意を惹いたり自分の意志を通すために粗暴にふるまう性向、つまり攻撃性は、男子の顕著な特徴である。その他の知能面や性格面でのきわだった性差について、研究者が一致して支持する見解はないようなものである。

念のためつけ加えるなら、問題なのは統計学的な意味での性差であって、個々人を比較すれば、数学にひいでた女性もいれば、他人

に対していつも非攻撃的・消極的な態度しかとれない男性も当然ながらいるという点である。

四 性差の文化相対主義

このいわば第四のセックスの次元が、文化による影響を多分にこらうむるだろう点は私たちの想像に難くない。この文化による規定性を重視するあまり、このレベルでの「男らしさ」と「女らしさ」が、いつてみれば全面的に文化によって作り出されたものにすぎないと主張する人々さえいる。彼らはしばしばアメリカ合衆国出身の文化人類学者ミード (M. Mead) の研究を引き合いに出して論じている。

彼女はニューギニアの三つの部族における性と気質の調査研究 (一九三五年) において次のような結論を導いた。アラペシュ族、ムンドウグモル族、チャンブリ族という、比較的近くに居住していた三つの社会集団における男女の関係や役割は、欧米文化に育ったミード自身の先入観をはるかに越えたものだった。アラペシュ族では、男も女もともに、親子関係から見れば「母性的」で、性の側面から見れば「女性的」といえる性格を示していた。ところが、ムンドウグモル族では男女とも母性的なものはほとんどちあわせず、攻撃的な性格の個人として成長する。彼らは、欧米文化の基準でいえば、行儀の悪い乱暴な男だけに見られるような性格タイプの人間であった。特筆すべきなのは、アラペシュ族やムンドウグモル族では、両性間の性差は何の役割も果たしていないという点である。さらにチ

ャンブリ族では、欧米文化とは正反対の性の役割や性格が発見された。女が男より優勢で管理的役割を果たし、漁をして獲物を稼ぎ、男は女より責任が軽く、臆病な気質で衣裳に深い関心を示す、といった具合である。こうしてミードは、「男らしさ」や「女らしさ」は普遍的でも絶対的でもなく、文化的要因によって変化するばかりか、そもそも文化によって作られたものにすぎないという結論——一言でいえば、性差は文化相対的なものである、という結論を導いたのだった。

五 ジェンダーは「恣意的」か

このような議論を背景として、六十年代後期に「ジェンダー」(gender) という用語が、性をめぐるフェミニストの理論や政治運動の中核に据えられるようになった。すなわち、「セックス」が生物学的な性のあり方を意味するとすれば、「ジェンダー」とは、社会集団がなう文化によって構成された性のあり方をいう。(ちなみに、「ジェンダー」はもともと文法的概念であった。たとえばフランス語では名詞を性の観点から分類するが、ジェンダーとはこの分類なし分類クラスのことをいう。語源はラテン語の *genus* である。冒頭に掲げた、太宰の小説中の人物の表現がまことに適切だったのが今にしてわかる。ジェンダーとは文字どおり「種族」であり、*genre feminin* とは「女類」のことだからである。)

ジェンダーという概念は、性差が多少とも文化に相対的であると

いう含意をともなっている。民族誌をひもとけば分かるように、性のあり方が文化的要因によっておおはばに規定されるのは事実だろう。しかしこれを認めることと、性差の文化相対主義を認めることとは別個の事柄である。この種の文化相対主義が理論的に正当化される見込みはほとんどない。近代社会を覆ってきた性別役割分業——男性は職場や公共的空間での労働を分担し、女性は家庭という私的空間で家事と育児にあたる——が、私たちの文化における比較的近年の歴史的産物にすぎず通文化的なひろがりをもたないこと、この点を、相対主義者とともに私たちも認める。しかし、文化によらず何らかの性差（人間のジェンダーとしてのあり方）が当該文化にそなわっているとすれば（性の非対称性）、文化相対主義者の言いはおおはばに割り引いて聞かなくてはならない。なぜなら、文化相対主義はとどのつまり性差一般の否定に落ち込んで行かざるをえないからである。性の非対称性が（ソシユールのいう意味で）恣意的に（arbitrairement）構成されるのなら、「おのずからなる性差」などは存在しないことになるだろう。

もちろん性の非対称性には程度や質の違いがある。インド社会では映画館で男の席と女の席が区分されているというが、こうした性の隔離主義が社会全体に行き渡っているケースと、男女が入り交じって暮らしている社会とでは、性差のあり方はずいぶん違つたろう。にもかかわらず、性差は全面的に文化により構成されるのであり、どんな意味でも与件ではない（つまり、性差にはリアリティがない）と主張する相対主義は背理であろう。むしろ、性については、文化

的要因によって規定される部面、したがって文化ごとの変異可能性にとむ部面と、主として生物学的要因によって規定される部面、したがって変異可能性に乏しく通文化的に普遍的な相を呈する部面とが結びつきつつひとつの性を形づくる、とするのが妥当な見方ではなからうか。性差には多少とも自然との絆が含まれていて（ソシユールのいう「有契的」(motivé)であつて）、それと文化的要因とを純粹に分離するのは不可能なのである。

六 ジェンダー概念の濫用

ジェンダー概念について、一つだけつけ加えておこう。フェミニストをはじめとする進歩主義者はしばしば次のような推論をやつてみせる。「日本文化にはこれこれしかじかというステレオタイプ化したジェンダーがある。しかし、ジェンダーは人間の自然性(human nature)に根ざすものではなく、文化により構成されたものにすぎない。したがって、これらのジェンダーは廃棄してしまうことが正しい。」これが誤謬推理であることはいうまでもないだろう。仮に小前提が正しいとしても（そう断定できないことはすでに述べた）、この結論は飛躍である。日本文化において現にあるジェンダーのあり方(status quo)は文化の伝統の一部である。それが自然ではなく文化的・歴史的に形成されたという理由のみから、この伝統を破壊すべきであるという結論はもちろん従わないし、破壊してよいことにもならない。

ただし、ジェンダーのどこがどのように人間のゆたかな生を阻んでいるのか、そのいけない点を直すべきだ、という主張は主張として十分に成り立つ。しかしこの穏当な主張とジェンダーの全面的な否認とのあいだには無限の距離がある。近年、進歩主義者がしばしば「ジェンダー・フリーの社会」を輝かしい理想のように語るのを耳にする。tax-free (免税の)、lead-free (無鉛の) などの用例から類推して、「ジェンダー・フリーの社会」とは「ジェンダーのない社会」あるいは「ジェンダーから解放された社会」を意味するとしか解釈できない。陋習としての性別役割ないし紋切り型のジェンダー・イメージにとらわれるな、という奨めや戒めとしてなら、この語句は十分に理解可能である。しかしこの理解は用語法そのものが裏切っている。

ところで、「ジェンダーのない社会」とはどのような社会なのだろうか。性の伝統をまるごと破壊して出現する未来社会が、真摯に生きるに値する社会となる保証はどこにもない。詳しい検討の余裕はないが、おそらく真実は逆であろう。「ジェンダー・フリーな社会」の一つのモデルとして、両性具有 (androgyny) の社会の夢が描かれることがある。この場合の「両性具有」とはもちろん医学的な意味でいわれているのではない。性的役割や行動や認知の面で、男性に帰せられるあらゆる特徴 (スーツにネクタイといった服装、攻撃性など) と女性に帰せられるあらゆる特徴 (化粧、同情心、育児など) をその社会のすべてのメンバーがかねそなえたとき、逆にいえば、性別に結びつく特性がその弁別的標識としての意味を失うとき、

「両性具有」の理想社会が実現するのだという。

このモデルより弱いタイプの両性具有社会のモデルも考えることができる。その場合、性に結びついた一切の区別は公共的領域 (職場や政治の場) から排除されることになるが、私的領域 (家族関係、家庭生活) では、そうした区別が温存されることを大目に見よう、というのだ。

しかし、いずれにせよこの構想には皮肉な逆説が含まれている。性別に結びついた一切の「らしさ」を無意味化するためには、男であれ女であれ、誰もがそうした「らしさ」を完璧に身につけなくてはならない、という逆説が。(もちろん人間からあらゆる「らしさ」を引き算してゼロにすることも「らしさ」の無意味化は達成されるかもしれない。しかしその場合には、人間性のすべてが空虚化されると同時に人間そのものが消滅するだろう。それゆえ、無意味化の方略としては特性を積分することしかないのである。)

現状でも、個体差のレベルでは「両性具有」はすでに実現している (たとえば、職場の仕事をやりになすと同時に料理や育児の得意な男もいれば女もいる)。しかし、社会全体としては歴然とした性差が認められるのであって、このレベルで「両性具有」を実現するためには、たとえば料理や育児の不得手な女は、厳密にいうなら一人も存在してはならないことになる!

ならず、ジェンダーが身体性の基盤から離陸することはけつしてないだろう。

医者が「性同一性障害」(gender identity disorder)と名づける疾患は、生物学的決定論と歴史主義がどちらも誤りであることを示唆しているのかも知れない。この障害に苦しむある人は、遺伝子のレベルでも生殖器のレベルでもその他の肉体上の特徴でも「男性」以外のなものでもないが、自分で自分の性別に深刻な違和感をいだき、「女性」としてのジェンダーを自覚している(単純な生物学的決定論の否定)。たいていの人の場合には、セックスの意味での性別と心理学的な性認識(gender identity「性自認」ともいう)とが調和しているのだが、これら両者に齟齬が起こりそれに苦しむ「性同一性障害者」は、自分たちのことを「トランスジェンダー」あるいは「トランスセクシュアル」と呼ぶ。事実上、彼らは性を生きる人間集団における性的マイノリティにほかならない。かつては、人間は中性として生まれ生後数年の養育のプロセスで一定のジェンダーが与えられるという仮設が唱えられていた(J・マネー)が、近年はむしろ生まれたときすでに人間はどちらかの性の傾向をそなえているという仮設が出されているし、性同一性障害の神経生物学的基礎についても知見が得られつつある(純粹な歴史主義の否定)。

九 性の「本質主義」の誤り

性について考えてきたが、ここで、カテゴリー論の観点から〈女〉

や〈男〉のカテゴリーの構造を見きわめておくことにしたい。私たちはややもすれば、男女のカテゴリーが、性の全領域を、隈なくそして互いに重なり合うことなしに、二分すると考えがちである(この場合、ある人が男でないなら、自動的にその人は女である)。この考え方は、形而上学では「本質主義」と呼ばれる。ある人間が男であるのは彼が男性としての「本質」(XY型の性染色体?)をそなえるためである。ところが、私たちが生きている性の現実の本質主義をはるかに越え出ている。

詳しいことは性科学の専門書にゆずるが、性別の発生はおおよそ三つのステップを踏むという。まず性染色体というステップ。XX型やXY型以外にも、XO、XYYなどの型があることは冒頭でも述べたが、その他にも、XXX、XXXYなどの型やXXとXYの混合型などがある。これらの型によって胎児の性腺(卵巣、精巣)のタイプがきまるが、胎児は次にホルモン分泌というステップを通過しなくてはならない。もし出生前の男子の胎児に十分な量のミューラー管抑制ホルモンの分泌がなければ、男性なのに子宮と卵管が形成されてしまい、精巣が体内に留まったままになってしまう。そして最後のステップとして、適切なホルモン分泌があったとしても、それに感応する機構をそなえていなくてはならない。たとえば、十分なアンドロゲン(男性ホルモン)を産出する精巣をもち遺伝的にも男性なのに(性染色体がXY型)、アンドロゲンを受容する機能が不完全だとアンドロゲン不感症候群がもたらされる。この子は前立腺や精管をもたず外生殖器は女性のもののように見えるので、出生証明

書には女性として記入され女の子として育てられることになる。性の自意識 (gender identity) も女性である。

受精から出産までに経るステップはこのように多岐にわたっている。そのために性的な変異 (性器の発達に著しい変化をきたすこと) のおこる確率は相当なものとなる。この種の変異をこうむった人々を「インターセックス」(intersex) あるいは「半陰陽者」(hermaphrodite) と呼ぶが、彼らの性別判定はひどく曖昧で困難である。なぜなら、彼らは男(女)としての本質をそなえていないからである。これはそもそもそうした「本質」などが存在しないことを意味している。

十 〈性〉カテゴリーの構造

へ人格へカテゴリーと同じように、性のカテゴリーもロツシエのいう「自然なカテゴリー」(natural category) であり、ニーダム (R. Needham) のいう「多配列的ターム」(polythetic term) なのである。¹⁾ 「自然なカテゴリー」としての性のカテゴリーの構造を詳細に規定することは、認知心理学を初めとする経験諸科学の仕事である。ここでは、この種のカテゴリーを形づくる二つの構造要因について確認するだけにとどめよう。

セックスとジェンダーについてのこれまでの議論を念頭に置いて、あらためて〈性〉のカテゴリーを観察してみよう。それを規定する「特徴」(ニードム) として以下のようなものを数え得ることがわか

る(これらはカテゴリーの「条件」ではない点に注意)。

- 性染色体
- 性腺
- 外性器
- 内性器
- 出産時の性指定
- 第二次性徴
- 性自認
- 性的指向
- 性別割
- ...

ちなみに、「出産時の性指定」(sex assignment) とは医師が出生証明書に記入する性別のことであり、「性的指向」(sexual orientation) とは性的行動がどの性に向かうか(向かわないか) という点をいう。性別割 (gender role) はここではごくひろい意味に取ることにする。つまり、ある社会が性別に期待する「男は職場、女は家庭」といった役割をはじめ、行動様式、服装、物腰、思考様式、趣味などのすべてである。

たとえば、AさんはXX型の性染色体をもち、その他の身体的特徴も女性であり、自分でもへ女としての意識をもち、性的対象としてふつうの男性を選び、性別割でもおしなべて当該社会の平均的な女性が身につけた役割にはほぼ合致しているなら、Aさんはへ女性へのプロトタイプだといえよう。ところが、BさんはXX型の性染色体

体をもち、その他の身体的特徴も女性のものであり、性自認も〈女〉であるのだが、性的指向が同性に向かい、性役割において平均的な相からかなりの偏差があるとすると、この人はカテゴリーとしては〈女性〉に属するが、プロトタイプ性はかなり低いといわなくてはならない。さらにCさんを考えてみよう。この人はXO型の性染色体をもち、卵巣を一つもつが卵細胞が存在しない。卵胞ホルモンが分泌されないので、月経などの第二性徴が現れない。自分としては女としての意識をもち性的指向は男性に向かう。インターセックスの一つのタイプであるCさんは、同性愛者Bさんとともに、〈女性〉のカテゴリーの周辺部分に位置する〈引き立て役〉の機能を果たすのである。

男女の二分法はある意味では事実には反しているし、ある意味ではやはり現実を形づくっている。私たちの言いたいのは次のようなことだ。実際に、男とも女とも明確には決められない多様な性のあり方があるかぎり、二分法は事実には反している。ところが、プロトタイプ効果と無化の効果の二重の効果性が性的カテゴリー構造にそなわるかぎり、真正の〈男〉と〈女〉のカテゴリー領域が画定されると同時に、それらが重なり合い接し合う領域がいわば「第三の性」の領域として形成される結果となる。文化や時代によって変遷があるにせよ、同性愛者、インターセックス、トランスジェンダー、トランスセックスなどの〈第三の性〉の所有者たちは、社会的に差別されるが多かったし、いまもさまざまな意味でネガティブな規範性を付与されている。そして看過すべきでないのは、「まともで正常

な」男女という性別二分法が現実性のレベルに押し上げられるのは、〈第三の性〉の差別を媒介することによってであるという点である。男が男であり、女が女であるという「本質」は、傷つきやすい(vulnerable)彼ら第三の性の所有者たちの痛みを代償として購われたものなのである。

(注)「多配列的用語」とは、「単一にとりだせばどれも必要な特徴ではないが、それらを集めてなった特徴のセットで特定化できるような用語」のことである。社会的事実(タブー、トートミズム、儀礼、宗教、封建制、シャーマンなど)は古典的カテゴリーをなさない。それらは「多配列的用語」によつてはじめて分析可能になる。R. Needham, *Polythetic classification: convergence and consequences*, *Man*, vol.10, no.3, September 1975, pp.349-369; *Symbolic Classification*, Santa Monica: Goodyear, 1979, pp.62-67. 人類学文献に出現するたゞの用語が古典的カテゴリーを表現しないことを、スペルベル(D. Spelber)が強調している。スペルベル「人類学とはなにか」(菅野盾樹訳)、紀伊國屋書店、一九八四、五十五頁。D. Spelber, *Explaining Culture*, Cambridge: Basil Blackwell, pp.16-18.

なお筆者は、古典的カテゴリー論の誤りと〈自然的カテゴリー〉の構造についてたびたび考察を述べている。たとえば以下の拙論を参照されたい。「いまなお生きる人間」の倫理学、「大阪大学人間科学部紀要」、二十三号、一九九七、一一一―一三〇頁。「記号的想像力と人間―世界に生きる／世界を想像する」、中島義明・太田裕彦編「フロントニア人間科学」、一七四―一八五頁、放送大学教育振興会、一九九八。とりわけ〈人格〉カテゴリーについては、「胎児の道德的身分につ

ら』、『生命倫理』、vol.8, no.1 (通巻6号)、一九九八年九月、四〜十一頁、を参照。

【参考文献】

性に関する総合的な論究として、

J・マナー／P・タッカー『性の署名』、人文書院、一九九〇

E・シュロル／O・チボー編『女性とは何か 上』(身体編)(西川祐

子ほか訳)、人文書院、一九八三

性差については次のような研究がある。

間宮武『性差心理学』、金子書房、一九七九

E・E・マッコビイ編『性差』(青木やよい他訳)、家政教育社、一九

七九

服部百合子『性差 相互存在としての男と女』、ユック舎、一九八一

なお、次の論文は性差の心理学的研究における問題点を指摘している。

加賀恵美子・田中佑子『女性と心理学』(女性学研究会編『女の目で見

る』(講座女性学4)、勁草書房、一九八七、所収)

本文で言及した、フェミニストの歴史主義的ジェンダー論として、

荻野美穂『女の解剖学―近代的身体の成立―』(荻野美穂ほか『制

度としてのへ女』)、平凡社、一九九〇、所収)

L・ニコルソン『ヘジェンダー』を解説する』(荻野美穂訳、『思想』

八五三号、一九九五年七月号、一〇三頁〜一三四頁)

荻野美穂『女性史におけるへ女性』とは誰か』(田端泰子ほか編『ジェ

ンダーと女性』、早稲田大学出版部、一九九七、所収)

性同一性障害については、

松尾寿子『トランスジェンダリズム』、世織書房、一九九七

虎井まさ衛・宇佐見恵子『ある性転換者の記録』、青弓社、一九九七

針間克己『性同一性障害の概念及び現況』、『ケース研究』二五四、平成九年第四号

インターセックスについて一般向けの文献は多くはないが、次のものはインターセックスの全体像を描こうとしている。

橋本秀雄・小田切明徳『インターセクシユアル(半陰陽者)の叫び』(かもがわ出版、一九九七)

文化史の見地から、負の規範性を負わされたインターセックスについて考察したものとして、次を参照。

L・フィードラー『フリークス』(伊藤俊治ほか訳)、青土社、一九八六、第七章

(後記)

本稿は、目下構想・執筆中の「人間学」のテキスト(産業図書、近刊)の一章として書き下されたものである。

Homo Sexualis

Tateki SUGENO

People came to distinguish clearly between the notion of sex and the notion of gender particularly after sixties. Especially the notion of gender has played an important role in feminists' theories and their practical movements.

The author develops two arguments about these notions. First of all the author proposes a kind of naturalism concerning the notion of gender, while he argues against a biological determinism as well as such a historical relativism as L. Nicholson insists on. Secondly the author analyses the concept of sex as a kind of 'natural category' (E. Rosch) to overcome the dichotomy of sex and gender.

Key Words

sex gender cultural relativism naturalism natural category